

Title	脳内視覚研究
Author(s)	赤阪, 季与子
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 160-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52791
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

脳内視覚研究

赤阪季与子／大阪芸術大学大学院 芸術文化研究科芸術文化学専攻博士後期課程

“色は心で見る”といわれるように、色は人間の心理的な感情効果（知覚感情や情緒感情）の表出の鍵を握っている。

色の感覚は目のレベルで、色知覚は大脳レベルで生じ、さらに高次の大脳中枢では色の心理的な感情効果が現われて、私たちに大きな影響を与えている。

私は、「色とは」の問いに対して、心理的な面からはじめてその正解を得ることを深く研究した。

色の感覚は眼のはたらきによる生理的な現象であるが、感覚をとおしての衝撃は心理にはたらきかける。色の衝撃は、多くの場合無意識心理にはたらきかけるもので、人びとは色彩が心理にはたらきかけ、感情に大きな影響を与えていることに気づかない。色彩は無意識のうちに私たちの気分、気質、行動を左右している。赤い色彩環境のなかでは大きな赤の刺激のために興奮し、脈搏が増加するような感じかたをすることや、暑い感じがすることも、また逆に青い環境のなかでは沈静し、脈搏が減じ動悸がゆっくりうつような気持ちになり、青い色を見ることにより冷たく寒いような気持ちになるなど、いずれも色彩の心理におよぼす影響が大である。色彩は寒色と暖色という、2つの明瞭な心理グループに分けられる。この2つの明瞭な心理的グループは、私たちの身体に相異なる肉体的な反応を生み出す。赤を焔に、青を水や氷に関連させる連想は感情的な感応を示す。私たちはいずれか一方だけの心理的な刺激では満たされないので、人びとは寒色と暖色を併せもちたい欲求をもつ。調和の美しさも、心理的な満足による快感である。また色に対する嗜好も心理的な問題である。多くの人びとは男性なら寒色、女性なら暖色の嗜好度が高い。しかし、一つの色を白でうすめて明るくすると女性の嗜好度がたかまるし、逆に黒を加えて暗く濃くすると男性の嗜好度が増加する。なかには

一つの色に対して特別な心理的反応を示す人もいる。外傷による苦痛を経験した人は、赤と血の色を関連させて赤をいやがることもある。また苦しかった経験と特殊な色が関連して、その色をきらいさける人もあるし、特別に恐怖を感じる人もいる。

現代では、色の流行は国を越えて世界中を駆け巡っている。色はいたるところで心理に働きかけ、感情に影響をおよぼしていることを忘れてはならない。

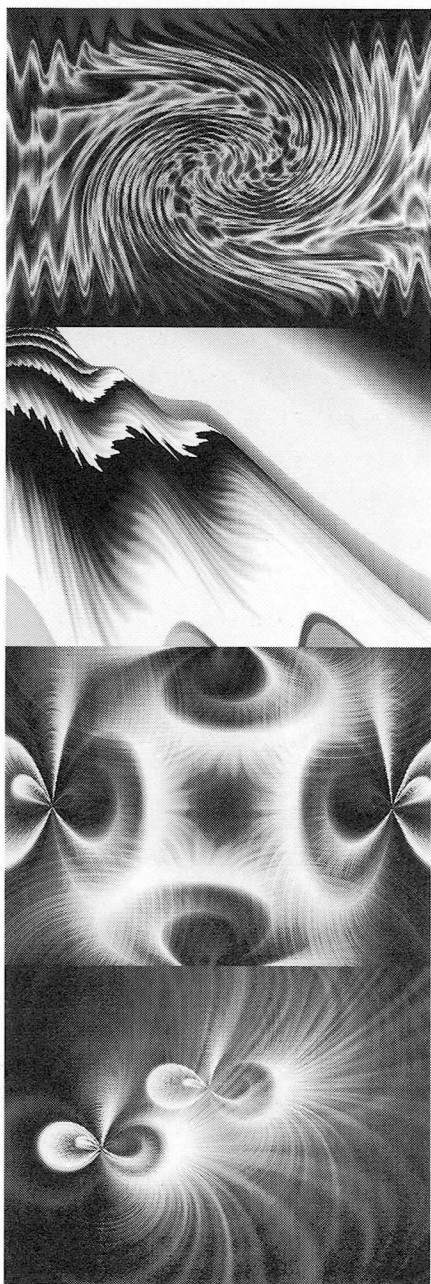
作品1.「色彩麗華」

いくつかの色が群れをつくりながら画面いっぱいに広がっている。整然と折り目たたく。だが、ふわりと浮き立つようにも。いくつかの強い色—濃い赤、濃い紺、濃い緑が要所を締めて、視界は晴朗。次の瞬間、間を埋めて、異なった系統の色が前に出て、画面を温かい空気で満たす。またさらに、次ぎの瞬間には、淡い色の一群が結集して暖色の背後にひと続きの壮大な空間を広げようとしている。画面は自ら生きて震動している。色を束ね、組み、つなげることで、さまざまな前後の動きがあらわれ、画面はけんらんたる装飾効果が生まれる。明るさ、はつらつき、壮快、ぬくもりと目に映る。色彩はまるでマジックのように私たちの心に感情のメッセージをもたらしてくれる。

作品2.「色のワンダーランド」

プロローグからエピローグまで、ドラマティックな展開が見もの。

息を飲むほどに感情の美しい色—真実を表わす白・さまざまな想いを包みこむ黒・曖昧性の灰色・情熱の赤・暖かさを感じさせるピンク・明るさを表わすオレンジ・太陽の色であり、喜びの色である黄色・安らぎの緑・神秘の色青・高貴を表わす紫—のかずかず、飽きのこない軽快なテンポに合わせ、ダイナミックなシーンが深みを増し、色とりどりのおとぎの国を創り上げている。



作品1.「色彩麗華」

上映時間 3分10秒/音楽 遠い思い出
~nostalgia~

Power Mac G4
Adobe Photoshop 6.0
Adobe Premiere 5.1 J



作品2.「色のワンダーランド」

上映時間 8分37秒/音楽 space flight
Power Mac G4

Adobe Photoshop 6.0
Adobe Premiere 5.1 J
Adobe After Effects 4.1 J